

## メディア的身体に向けて

### 「お稽古事」大衆文化における「身体と感性」

昭和五十年入学 稲賀 繁美

本稿を田中茂穂師範に捧げる

#### 前言

「武道」は中学からの学習指導要領に登録され、推奨されている。義務教育の一環であるからには「大衆文化」の一員だろう。さらに日本社会の「お稽古事」一般のなかでも「格闘技」と称される範疇の存在は無視できず、さらにひろく世界各地を見回しても、日本や東洋に起源をもつ「武道」や「武術」が思わぬほど広範な愛好者を得ていることが知られている。だがこの分野がいかなる理念に基づき、何を指すのかについては、およそ共通理解は成立しておらず、むしろ初歩的な誤解や混乱した「理解」が放置されている。本稿では「身体と感性の大衆文化」の一環として、あらためて「武術」という技術習得の意味を吟味したい。

スポーツ競技一般では優劣を競う。それはアマからプロを峻別し、優位と劣位の序列を創る。一般に近代以降の競争社会の縮図がここに現れる。大衆文化の担い手はアマに属し、自分たちでは真似できないプロへの羨望と「スター」への憧れが、自分の凡庸さへの諦めや劣等意識の屈曲を助長する。こうした成功者と失敗者との弁別のおかげに「大衆文化」も安住する。筆者は、こうした差異化構造はすでに社会モデルとして無効かつ有害だと考えている。

一つの代替案として、武術のお稽古事を検討してみたい。実践経験に基づいた大学生や受講者へのメッセージは、別途毎年のように書き留めた蓄積があるので、繰り返さない。ここではより「論述」に近い体裁の文章とする。だが、意味のある「論述」あるいは「教科書」にどのような文体や伝達手段が最適かについての疑義も、本来なら「稽古論」と切り離し得ない課題となる。

冒頭に、世間の常識を裏切る前提を立て、そこから出発したい。まず、攻め手と受け手の敵対、勝者と敗者との対立を無意味なものにするのが、「武術」の目指すところである。言い換えると、こうした対峙とか対決といった先入観に捕らわれる限り、「武術」の稽古は先に進まない。本稿はまた「身体と感性」を考えるうえで、「メディア的身体」

という概念を検討するが、優劣や勝負に拘泥する限り、*ego*＝「媒体」は身体感覚から排除される。「我」と「相手」を前提とするデカルト派的思考から出発する限り、この限界は越えられない。手ほどの段階で、この間違つた前提から「入門」すると、競技スポーツの枠組みに囚われ、その先の境地に達することも、きわめてむづかしくなる。だが若者は競争心に富み、同輩に対する優位を誇る気持ちなくしては、容易に向上心を獲得できない。教育環境それ自体が、偏差値による序列付けを自己目的化し、社会全体がこうした悪しき価値観の固着を煽っている。「大衆文化」を価値論も含んで再検討するならば、この点への反省を避けては通れない。

「スポーツ」を敵視し、「稽古」を見直すというと、それだけで、西洋対東洋の対比が思い浮かぶ。だが問題を東西対立として設定してしまえば、それ自体、ここで解消しようとはせず「対立」を、かえって強化させ、そこに「居付く」結果を招く。「代替価値」*alternative* を目指す多くの「東洋」志向が、ここで手段と目的を取り違える。「東洋的価値」によって「西洋」を凌駕しようとか、「西洋」の桎梏を脱して「東洋」の精髓を「極めよう」といった上昇志向そのものが、最初から目指すべき目標を取り違えている。「大衆文化」の担い手に、このような「大衆」を裏切る「優越」への「憧れ」を植え付ける「メディア」からの脱却こそが、ここで「メディア的身体」を通じて、模索されなければならないはずである。

と同時に、現在の学会で公認の基礎概念に頼る限り、こうした探索は功を奏しない。なぜならそれらの基礎概念そのものが「競争・敵対」の原理と骨からみだからだ。行政文書や企画書を含め、「主体」*subject* による「目的」*objective* の設定と、それを「実現する」ための「プロジェクト」*project* の立案が要請され、それが審査による「競争」*competition* の結果、「拒絶」*reject* されれば、必要な資金援助は得られない。ここに「*ego*」という語尾が頻出するが、これは印欧語族では「投げける」の語源を共有し、あらかじめ想定された主体や観念を現実へと「投射」させ、それによって現実を変容させ、もって主体の目的を達成しようとする志向に支配されている。これが人間による自然に対する「闘争」であり、そこにおいて有能とされる指標が「能力」*competence* として社会的に認知され、敗退者は汚物 *waste* として排斥される。そこには敵対を煽る異議申し立て *objection* が濃厚に漂う。だがこれに替えて *target* という概念に注目したい。これは「横切つて」身を「投じる」という語義から派生する。*trajectory* といえ、そうして辿り、経巡つた軌跡、道程を指す。浄土宗で広く用いられる「横超」の概念も *target* と結びつけられるだろうが、

これはまだ将来の課題だろうか。

## 1. 格闘技 vs 武術?

ここまでの論述に、すでにまったく納得できない読者も多いだろう。冗談もいかげんにしろ。武道や武術といえは martial arts であつて、格闘技は敵を倒すことを目的とし、武術といえは、突き詰めれば殺人技術ではないか。そのどこが、敵対を避けようとする平和主義なのだ、と。もつともな反論だが、ここにも混乱がある。Martial の元は Mars だが、これはギリシア・ローマの神話では戦闘の神、惑星では火星に由来する。他方、漢字の「武」は字義通りには「戈を止める」とあり、むしろ「和平」を含蓄する。ラテン語の「平和」pax は契約 pact などと同根であり、協議によつて争いを調停する営みやその状態を指す。とすれば「武」こそが pax だとみるほうが、語源的にはより妥当する解釈ではなかったか。

だがそうした学者めいた辞義の詮索から離れて、きわめて「実践」的にみても、競争に囚われる限り、「武」術の上達は、早々にして停止する。己が心に棲まう「敵対心」「敵愾心」という「難敵」をいかに撲滅するかが、「武術」のめざす「メディア的身体」(corporeal body) に「気づく」ためには、不可欠なだから。というのも「敵」と認知した agent に対して「オマエは敵」という信号が伝わつてしまつて、そのものが、致命的な事態を引き起こすからである。(agent は「行為する」という語源から発しており、哲学では「作動因」、社会学では「行為者」、言語学では「動作主」なども訳さる。対照的に「主体」subject は語源的には「下に置かれる」を意味し、キリスト教の文脈では「神の僕」、転じて隷属状態(「臣民」)を指し、もともと能動性よりも受動性の強い観念だった。ちなみに、英語の good や data は「与える」に由来し、good は「為す」からの派生と、印欧語の「コト」は、何者かの行為の結果として生じたという含意を持ち、その「何者」かが、唯一神の「創造主」に仮託される)。

敵対心を漏らす行為が、現実には「敵」を発生させてしまう愚行となる。とすれば、この愚行を犯さない訓練とは、心的な「自制」ということになる。攻撃を未然に防ぐには、まず不用意に相手に対して「敵対意識」などを示さないに越したことはない。また「自己防衛」の姿勢を取ることも、かえつて自分を危険に陥れる結果を招く。なぜなら、アイツは何か守らなければならないものをもっているのだという「弱み」を相手に開陳することになるからだ。「攻撃」にせよ「防衛」にせよ、それを匂わすのは、かえつて攻撃を誘発す

る危険を自ら犯すことにほかならない。反対に、自分には何も守るものなどない、となれば相手は、攻撃の仕掛けようもなくなる。そもそも失うものがなければ、失敗や敗北を喫する恐れもなくなる。そんなの屁理屈だ、と反論する向きもあろうが、論理的に考えれば、そうなるはずだ。

悟性でもつてこの理屈を理解するのは、さして困難ではあるまい。だがこの理屈にそつて心身を操ることは、およそ容易とはいえない。実際の人生では、周囲と敵対したり、利害が対立したり、立場上何かを保護することが社会的な義務となつたり、といった状況を未然にすべて回避することは、できる相談ではないからだ。社会的な無責任に徹することで無敵を標榜できたとしても、これは端迷惑な自分勝手ではないだろう。本能に逆らつて、自分の身に危険を及ぼす行為を選択せねばならない場面も生じるだろう。また社会正義と信じる道に反する選択を、社会的義務として負わせる局面とて、平凡な人生にも何度も発生する。

こうした事態にいかに対処するか、その「メディア的身体」を練るのが「武」ではないか。

## 2. 同調する身体

能の仕舞にも通じた武術家の内田樹は、能舞台で舞う際の経験を語っている<sup>20</sup>。そこでは周囲といかに自己を媒介させるかが決め手となる。「周囲」とか「自己」といった語彙そのものが、その体験を理解するには、きわめて不十分という以上に、かえつて障害となるのだが、そのことも念頭に置いておこう。能舞台には鼓や笛、囃子方らが発する音や声張り巡らされている。そこに西洋の交響曲のような指揮者は不在だが、互いに互いの出方を見ながら調律と発声がなされ、その波動が動きながら舞台を覆っている。仕舞のために舞台に立つと、あたかも水中に身体を没した時のように、ねつとりとした液体のような音色や声音に体は包まれ、そこに浸かつているような感覚を覚える。舞台上で自分が占める位置や、歩を進める移動につれて、音波の極性や強弱は変化し、それらの総体がなす音の渦や密度も変貌を止めない。仕舞を演ずる身体もこの音波に共鳴するように振動し、その場の密度の濃淡や粘度の強弱を感じ取る。流れのある水中、あるいはより粘り気のあるゼラチンのなかに手をかざしつつ進むように。そこには同調や破綻が感じられるも、心身が励起されるにつれ、変容してゆく大気＝雰囲気(air)の打撃に身体が「触れている」という感覚が生まれてくる。

この音響に浸され波打つ場のなかでは、自分が自分の意思で舞う、という感覚は薄れ

てゆく。自分の意思で動作を選ぶのではない。むしろその場がいつどこでどのような所作を取るのがふさわしいかを教えてくれる。そこには分節化された言語による指示はない。分節化された言語とは、つまりは主語と動詞とが画然と区別され、それによって統御される言説空間を意味する。舞台上では強制や恣意とは無縁に、どの瞬間にどこでいかなる所作をなすべきかが、おのずと定まる―そこからの逸脱はありえない、という「かたち」を取つて。比喩を許されるなら、それはひとつの磁場であり、そこに関与する複数の「動作主たち」agents は、互いに強制されるとか、誰かの指揮に従うといった感覚とは無縁に、「同期」synchronization が実現してゆくのを感じする―個々人の意志といった次元を超えた境地で。それは、若いころに経験したグループ・サウンドでの合奏の「グループ」groove 感覚とは、どこかで決定的に異質なのだ、と内田は観察する。こうした「忘我」ecstasy 体験は、ともすれば「憑依」などと形容され、神秘主義の色合いを帯びがちである。「自己」の「主体性」の放棄として、批判される。だがここに、「メディア」media としての「身体」への入り口がある。

### 3. 不可視の通路

武術の場合にも、試合競技は盛んになされていて、ここでは「先を取る」といったコトが話題にのぼる。分析的に見れば、相手の出方を読んで、時間的あるいは空間的に先手を取る技法だろうが、スポーツ競技でも訓練されるこうした(姑息な)「トリック」の理解は、その水準に囚われると、かえってその先に進むことを困難にする。これは日常的にもごく普通に経験することだろうが、音楽を聴きながら、それに合わせて踊ろうなどと意識すれば、どうしても出遅れしまい、リズムには乗り損じる。だが、だからと言って、自分で率先してその場を仕切ろうとしても、今度はひとり芝居を演じるだけで、周囲がついては来るまい。

言い換えれば「適用」を意識すると、かえってうまくゆかない。能の仕舞に戻れば、濃厚で粘着性のある空間に、一種、目に見えない「穴」があつて、その所在が五感で感じられるようになる。ちょうどよい「間合い」が出現してくるのだが、その空隙の「通路」passage にすらりと自分の身体を滑り込ませることが肝要となる。周囲から到来する楽の音や囃子、掛け声や謡によつて織りなされゆく立体空間に、空虚として残された通路が現れる。いわば潜在性として開かれた「余地」だが、そこに舞い手の身体がすりと入り込み、その空隙の「間」を時間的・空間的に通過 pass することで、舞台は

初めて成立する。

同じ事態を別の方向から観察してみよう。電子回線のうへのオン・ラインで合唱を試みて、かえって明らかにしたのは、ひとつの「場」を構成するのに不可欠な「同調」を達成することのむづかしさだろう。「同調圧力」という言葉は、現在では、見えない社会的強制力に無意識のまま従つてしまう傾向が大きい日本社会の病理を指す言葉となつている。だが「圧力」も感じないまま、なぜか同調が生まれてしまう不思議さに、その「危うさ」もあるはずだ。そして武術のひとつの基本的な「こ」は、こうした無意識の同調に乗つてしまいがちな相手の「間合い」を外す「技」となる。意図してもいいのに、人は何かに同調して、うっかり「出遅れ」たり、無意味に「勇み足」を踏んだりする。その「場」にあつては、これはどちらも「間抜け」た事態であり、無効であるばかりか、不利な状況を生み出してしまふ。こうした「踏み外し」fall pas を誘発させると、そこにはおのずと「スキ」が生まれる。

こで生まれた「すき」を埋めてあげるといふ動作によつて、「場」の均衡は回復する。「わざ」が効くとは、この瞬間の謂だろう。それは相手の弱点や「隙」を突いて、相手を崩してやろうという「意志」とは対極をなす。むしろその「場」にあつて「間」が抜ける「事態」を回避する営みといつてもよい。それを「予防」prevention とか「治療」intervention といつた言葉で説明すると、すでに事態を裏切つてしまふ。まさに「場」への「適応」adaptability や「同期」synchronization として行為を説明しても、しつくりこなかつたのと同様に。いうまでもなく「場」に出現した「通路」は、それを埋める行為者がなければ、通路として見えてこない。また埋める行為者がなければ、瞬時にして消滅する。さらにその通路がしかるべく「満たされた」場合、そこにはもはや空虚も現前はない。あたかも何もなかつたかのように、事態は推移する。この通路への参入によつて行為者は閉塞から開放されつつ、充足を体験する。それ以外の逸脱を許さない通路に進みながら、ここでは選択を無理強いられたという抑圧は、心身ともに無縁となる。事態は成就してみれば、自ずから成つた spontaneous という充足感に満たされる。その「場」に関わつた個人の意思は昇華され、「場」の集約と充実は、いわば非人称の符牒を帯び、その名づけ得ぬ「なにも」が「場」を統御する。

### 4. 環境との自己媒介

こまで述べて、思わず似たような体験や感覚を想起される読者もあるだろうか。

ひとつは海の上の帆走だろうか。およそ帆船に関わるには三種類の人種があるという。まずヨットを所有することを社会的な地位の表徴とする人々。高価で豪華な帆船を所有している owner たるものが status symbol となる。ふたつめにはヨット競技者。かれらにとっては競争 competition で勝利をおさめ、記録を打ち立てることが目標となる。競技スポーツとしての帆走が彼らの業務となる種目である。だが第二には、航海を自己目的とする人種がある。風と潮目を読み、帆を操って船を進めることが彼らの務めであり、生きがいでもある。

帆船はもとより意のままに進めることはできない。『意識の形而上学』で井筒俊彦の述べるところを敷衍しよう。海面とは海と空との接触面であり、液体は気体に触れる面で波を立て、空気は風を起す。海底の地形や海流と、大気圏の状況との錯綜がその臨界面の表情を創り、大気圧に沿って海面は上昇あるいは沈下し、波浪を含み、うねりを生じる。海面とはふたつの領域の出会いの臨界であればまた、両者がひとつとなることで描く軌跡でもあり、その両者のあいだには、いかなる空隙も余白もない、と。だが帆船はこの自然条件を縫って、そこに開く「通路」passage のうえに軌跡を描く。哲学者の井筒は、この動揺を続ける海水面に、揺蕩つて留まるところを知らない意識の生態を見る。いわば水面が無意識の地図の表層をなすならば、人の意思とは、その海原のうえを行く帆船が刻む航跡 trajectory、といつてよいかもされない。先に見た Traject はこうした臨界面に生ずる軌跡の様相を描写する。

その航路は容易に予見しがたく、また知覚しがたいが、後からみれば自然の摂理の必要をなぞっている。能舞台の立つ仕舞の動きにも似て、その通路は必然でありながら同時に自由への開口部であり、海のうねりと風の息吹とのほゞまで、それ以外にはありえない道程が開かれてゆく。さまざまな予兆や前兆を玄人は見落とさないが、さもなくば小さな帆船は容易に転覆する。悪くすれば致命的な難破の危機と隣合わせのなかで、航海者たちは風を帆に捉える。マイケル・ギブソンが affordance と呼んだものの原初の姿がここにある。

ヨットでの帆走が「大衆」の娯楽とは言い難いなら、波乗りはどうだろうか。サーファーたちは乗るのに適した波を根気強く待ち、大きな波濤の下につかの間開いて、数秒後には崩れ去ってしまう「通路」passage へと、ボードごと身体を滑り込ませる。空と海との出会いが約束する「客観的偶然」hazard objectivity と「一体」になることで、波乗りは成就される。それはもとよりサーファーたちの意志を超えた自然条件に自らの身体を託す体験

だが、しかしそれは、受け身一方の「運命任せ」でもありえない。自然としばし「同値」equivalent に溶け込む「勇氣」なくして、事は成就しない。波の下の「通路」に招かれるのに必要なのは、頑なな意志ではなく、感受性に富んだ浸透性を宿した、精神の従順さといつてよいか。ある種の「自己放棄」が逆説的にも思わぬ成功を約束し、波を渡る奇跡を媒介する。

卓越した精神科医であった中井久夫もこう語っている。治療がうまく進んでいる瞬間には、医療者は自分を感じない。そして不安も消滅する。おそらくは外科手術が順調に進んでいるときの執刀医の感覚も似たものではないか、と。予期せぬ事態の退却で不安に駆られたり、手術上に突発した緊急事態に直面したりすると、医師は自らの意志を働かして事態に介入しようとする。だが経験に照らしてみると、そうした介入 intervention は往々にして失策に結び付く。とりわけ功名心は、こうした場合に碌でもない結果を招きかねない、と。一見あまりに「受け身」で能動性に欠くように見えるが、こうした危機に際会した場合には、無理に意志を貫徹しようとするよりは、かえって「我をむなく」する態度が、最良の処方となる、とも。一見素朴な「実感」だが、これは武術稽古の原点とも通じる観察ではないか。

##### 5. 計測不可能なものを計測する

「身体」が本来内蔵していたはずの「感性」は、「近代社会」と呼ばれる人工的環境のなかで、大きく棄損され、麻痺してしまっている。だが「大衆文化」といおうか、大衆の娯楽として、かつてはどこにでもあつた遊戯のなかに、大切な教訓が隠されているようだ。

ここで取り上げたいのが、「凧あげ」と「釣り」。凧あげといえは、紙や布を軽い骨組みに貼り付けた機材を空中に浮遊させる遊戯であり、帆船の操船と同様に、風頼みの操縦術である。風向きを計算にいれなければ、凧はまず離陸しない。また上空の大気の動きが読めていなければ、凧を高く舞わせることもできはずまい。凧を上空に舞い上げる風と、それを地上に引き留めようとする糸との力の均衡のなかで、凧は中空に浮遊する。時には、凧が思いのままに大空と昇つてゆく折節もある。だが凧がつねにあつらえ向きとは限らない。江戸の俳諧にも、突風に凧を飛ばされて指に傷を負った経験や、糸が切れて制御不能となった凧を喪失する光景を歌った作品が知られている。もとより気まぐれな風に逆らつたのでは、成功はおぼつかない。ベンジャミン・フランクリンは雷雨のなかに凧を飛ばし、雷が放電現象であることを証明したが、これなどひとつ間違えば、

命に係わる危険な実験だった。

いうまでもないことだが、風は自律した飛行物体ではなく、帆船と同様、変幻きわまらない気象条件に敏感な観測装置に他ならない。風に頼って中空に漂うゾンデは、文法用語を用いるなら、能動 active でも受動 passive でもなく、中動態 middle voice を具現した装置といつてよい。その風が描く軌跡もまた気まぐれとの印象を拭きたい。だがそれは関与する複数のヴェクトルの和あるいは積の過剰決定が中立となった点の連続が描く「通路」の航跡に他なるまい。『遊びと人間』のロジェ・カイヨワは、風に空の「聴診器」を見出し、そこで風を操る練り手は、地上の身体から遊離して、「身を空中へと投射」し proper an air する経験を生きたと述べた。ここに、武術において追求される「技」の共通性がみえてくる。風という予見しがたい条件に翻弄されつつも、その条件のなかで風を安全に運航させる術。それは、敵対しかねない威力に対して、力によつて空しく対抗するかわりに、制御不可能で人知を超えた大気の循環を巧みに制御することで、その力を活用しつつ、相手の内情を掌のうちの糸をとおして、触覚として感知する技術である。はたしてそれは人間の能力を非人間化することなのか。それとも非人間的な力をヒトの手の内に収めようとする工夫なのか。

## 6. 釣り糸の沈潜

風が天空へと上昇したい志向の具現だったならば、釣りは感覚器を海底へと誘う。ここで相手は風ではなく、魚となる。著名な英文著書『茶の本』で天心・岡倉覚三は莊子の逸話を引いていた。或る日、川べりを散歩していた莊子は、川の中の魚が水中で遊泳を楽しんでいる姿に感心する。ところがその様子を見咎めて、友人がこう問うた。あんたは自分が魚でもないのに、どうして魚が楽しんでいるとわかるのか。と。これに答えて、莊子はこう返したという。あんたはわたしでもないのに、なぜ私には魚が喜んでるかどうかわかるはずがない、などとわかるのか、と。姿の見える魚でも、その感情は図り難く、魚の「身体と感性」をめぐる人間どもの思弁は、容易に対立し、論争含みとなった。ましてや水底に姿を隠した、目に見えぬ魚となれば、これと意思疎通を試みるのは、なおのことむづかしからう。

空の風あげと海中の魚釣りとには、方向こそ空と海と対照的だが、なにやら共通するところが見えてくる。糸の端から端へと伝達される触覚を通して、それを頼りに遠隔操作を行う技術である、という共通性だ。風の場合が大気の動力学だったなら、釣りの

場合には、視界の効かない海中の魚の餌に対する食欲、ということになる。どちらも生身の人間の手の届く限界の彼方だが、風ないしは魚という「行為者 agents」の気まぐれを指先で探知し、自然とヒトとの釣り合いを探るところに、遊戯の神髄が存する。風向きや風速は絶えず変転し、魚は生き物であるから、どちらもその行動は予測しがたい。この駆け引きの往還のなかで、「操作手 operator」といつよりむしろ「メディア的身体 joints nodes」は、咄嗟の直感的な指先の動作によつて、勘所となる瞬間を、あやまず正確に「捉える」ことを求められる。

とりわけ釣りの場合には、魚を捕まえてやろうとする人間の側の(邪悪なる)気配を消すことが肝要となる。水底の魚は、どうしたわけか、こうしたヒトの悪意をそれは見事に感知する。捕獲の意図を隠そうとしても無駄なことで、魚を騙そうとしても魚のほうが一枚上手で、逃げられてしまう。静かに釣り糸を垂れるといった釣りの場合には、釣り針にうまくひっかけてやろう、などという邪(ヨシマ)な意志が、釣りを失敗に終わらせる最大の原因であることを、人は経験からよく知っているはずだ。どうしたわけか釣り糸は、そうした舟上の秘された意図を、なぜか先端まで伝えてしまい、魚は疑似餌の悪たくみを察知して身を翻してしまふ。魚が釣り糸を飲み込んだ時初めて、釣り人は後知恵として悟る。——うまい具合に魚を捉えてやろうという傲慢で自分勝手な意志を、自分はいまよくやり過(こ)して、自己制御をなし遂げていたのだな、ということ。だが、はたしてこれは自己瞞着なのだろうか？

岡倉は、その晩年、北米東海岸のポストンでの勤務を終えて、茨城北方の五浦に戻るたびに、船頭に小舟を出してもらい、太平洋で釣り三昧に浸っていたことが知られている。彼の目的は晩飯の酒の肴を捉えることでも、餌食を自らの軍門に下らせて満悦を感じることでもなかった。むしろ魚たちは岡倉の精神的な同伴者だった。釣りに沈潜するのは、心を空(す)しつつ精神を統一する修行であり、魚たちはこの修行の同伴者だった。視界の彼方に佇む魚たちとの暗黙の聖体拝領 霊的交感 communion による沈黙考の行、それが太平洋上、空と海との間に漂う小舟の上での、孤独な精神修養の営みだった。収穫があつても岡倉はしばしば魚の口から釣り針を外すと、その魚を海に戻してやった、と伝えられる(ちなみに、鰓に指を入れれば、獐猛な魚も、自然に口を開く。この生理的仕組みは知っておくほうがよい)。精神の自由と開放を経験する伝手となった魚たちを、今度は岡倉が「自由へと戻してやった release」といつてもよい。不可視で予測を超えた沈黙の世界との対話を通じて、小舟のうへの岡倉という微小の存在は、無限の宇宙と

意を通じていた *se comminquer*。「無限の空間の永遠なる沈黙が、私を怯えさせず」*le silence éternel des espaces infinis m'effraye* とは、パスカルの言葉だ。だが極東の道教徒は、太平洋の海原と青い天蓋とに挟まれた揺り籠のような小舟のうえにボツネンと佇み、むしろ精神の静寂の境地を求めていた。それは美の使徒、岡倉覚三の「感性」*esthétique* な「メディア的身体」*corps médiat* の探求だったはずである。

## 7. 遊戯から殺人技術へ

凧あげといい、魚釣りといい、普通は大衆日常の遊戯と思われてきた。その当たり障りのない娯楽は、実際には「メディア的身体」を考察するうえに看過できない意味を担う営みであった。さらにそれは武術の提要とも無縁ではないことまで、見えてきた。反対に見境ない腕力の誇示や物理的な威力の優位性を示威する行為は、身の安全を保障するどころか、かえって危機を誘発して、身に危険を招きかねない愚行たりうることも、納得がいったはずである。たしかに技法的な優位性は品質表示としては役に立つ。だが優位にあるとの意識は、ともすれば傲慢さを漏らす原因となりかねない。それがかえって我が身の弱点を晒す標的となる。優劣の序列に囚われる態度は、ライヴアル意識という、嫉妬や恥辱の牢獄に自らを縛り付けてしまい、「メディア的身体の涵養にはかえって障害となる。もとより自然に逆らい、所与の条件に対抗しようと藻掻く限り、ヨットの操船も波乗りもままなるまい。人知の制御を超えた自然の脅威の前に、死を恐れぬ勇気を鼓舞したところで、向こう見ずな自殺行為でしかなく、何の役にも立ちはない。むしろ自然を前にした謙虚さこそが、「メディア的身体の」開拓の最初の一步となる。そして凧あげや魚釣りといった、一見何の役に立つのかわからぬ遊戯に、「平和」を探る「美的」感性的「な」心身教育への豊かな教訓が潜んでいた。

これに反して、もともと殺戮の技法でしかない武術は、定義からして生命の危険を犯す覚悟を、実践者に対して要求する。かかる人間殺害技法を習得することに、いかなる利点があるというのか。兵役や傭兵訓練の場を別とすれば、戦闘技能は今日では社会的な役割もすっかり委縮してしまい、民俗的な宗教儀礼やチャンバラ活劇、演劇の見世物でなければ、競技スポーツのなかで、擬制的な残滓として生き延びているだけだろう。そこに推奨される形骸化した「武術」は、学童に教えたところで、道徳心涵養どころか、却って害悪を成しかねない。好戦的な闘争心の育成など、生存には有害無益なことだが、すでに明らかなのだから。

## 8. 受動と能動の彼方へ

一般に西洋のスポーツは身体を保護するために、さまざまな防具や補助具を装着する。日本でも剣道などでは小手や面などに丈夫な防具を当て、怪我を防ごうとする。ところがこれとは対照的に、剣術の型稽古では鎧兜の類は外し、無防備な肉体を晒して稽古する。とりわけ真剣を用いた稽古などでは、不注意から刃物が皮膚に接触しただけでも、事故が発生しかねない。頸動脈や関節付近の動脈などは、刃物で損傷を受けただけでも、止血できず放置すれば失血死を招く。突きはさらに致命的だ。一方では身体を極力保護し、他方は身体を積極的に危険に晒す。ここには身体運動を進めるうえで、根本的な考え方の違いが顕わになる。

武術の稽古で身体を進んで危険に晒すのはなぜだろうか。ひとつの可能な仮説としては、裸体の露出が知覚の感性を研ぎ澄ますのに役立つことを指摘できよう。身体感覚を鋭くすることで、心身はわずかな異常にも気づく感性を養うことになる。逆に防具をまとい、丈夫な靴で足を覆えば、感覚は麻痺して危険を危険とは認識できなくなる。なにご致命的な状況なのかを身体に覚え込ませるには、身体をできるだけ無防備な状態で危険に晒したほうが、効果的だろう。そうした経験から、練習者は自らの身体やその生存がいかに脆弱で頼りない基盤のうえに営まれているのかを、身をもって悟ることになる。逆に暴力や物理的な加害行為が、いかに身体感覚を摩耗させ、精神を麻痺させなければ成しえないかも、納得されてくる。そうした感性を涵養することは、自己の身体を超人的なサイボーグへと置換して心身の優位を確保してゆこうとする性向とは、対極をなす。Cyborg が感覚麻痺によつて、死の恐怖を抹消する企てだとすれば、武術の型稽古は反対に、防具に守られれば見過ごされ、通常では経験できない「死」に、その近傍で「触れる」体験を可能にする工夫だといえる。

触れれば致命的な経験の近傍に可能な限り近づき、それなくしては回収できない体験を生る側へと回収する訓練。それが傷つきやすい裸体を真剣に晒す稽古の、ひとつの眼目と理解できる。日本語には「触ると」「触れる」の区別がある。「さわる」は通常の用法では意志をもった行為だが、「体に障る」といった表現では、無人称の「原因」が身体に触れて害悪をなす現象を指す。「ふれる」は意図せずして発生する接触を指し、自動詞でもあれば他動詞でもあり、能動と受動の両方の役割を包含する。「手に触れる」とは、日常の用法では他動詞的には、手によつて何かを触ることだが、それが意図的な動作な

のか偶発なのかは、状況による。言い換えれば、「触れる」は印欧語族で言うところの「動態」の機能に近く、さらに自動詞として「気がふれる」といえば、これは「発狂」を意味する。それが外因による病変なのか、内部からの変性なのかは、病理的にも区別できない。この外因と内因とが交叉する地点では、受動と能動との弁別は消滅する。環境の側の必然は、*ニニ*で行為者の側の絶対の自由と混然一体となる。それが「媒介する身体」の「*ニニ*」のありかとなる。

## 9. 「おもい」*と*「うら」あるいは *corps médial en trajection*

原因は結果が判明して初めて遡及して推測できる。そうした行動を模索すること「武」の修行の一端をなす。「媒介的身体」の探求とは、因果律から身を振りほどく工夫なのだから。「攻守所を変え」というが、「攻守」は「裏表」をなす。だがそれは能動と受動という二項対立ではない。「表裏一体」でなければ事物は成立しない。空と海とがなければ波浪が生じないのと同様に。だがだからといって、攻撃や守勢を「隠す」のではない。なにかを隠そうとしても、熟練者はそれを容易に見抜く。隠蔽は露呈する性質を宿しているからだ。そして相互の裏読みが螺旋を巻くと、騙し合いが亢進して悪循環を招く。それゆえ、相手を潰そうとか、攻撃を躲そうといった意図そのものを、いかに消去するか—それが武術の稽古の出発点となる。だが我が身の内なる悪意を「殺そう」としても、今度はその「殺意」が外に漏れる。努力の跡を抹消する努力とは、形容矛盾だが、それは日常に永続し、反転やまない行となる。将来のどこかに、裏表なき表裏一体という解

一 『赤門合気道』『上浜合気道』ほかに掲載。メール通信の蓄積も含め、別途公刊の予定。

二 『京都藝術センター編『継ぐこと・伝えること』2014所収の対談参照。また内田樹『武道的思考』筑摩書房、2010；『困難な成熟』夜間飛行、2017なども参照。「教科書」としても問題提起がわめて優秀。

三 Steven Hornbin, "Sailor of the third kind: Sailing and Self-Becoming in the Shadow of Heraklitos," in Patrick Google (ed.), *Sailing-Philosophy for Everyone*, Wiley-Blackwell, 2012, pp.72-76.

四 井筒俊彦『意識の形而上学』中央公論社、1993、183頁。

五 Michael Gibsonの名前を知らず、*affordance*って何とていう読者には、福岡伸一『芸術と科学のあいだ』木楽社、2015の記述あたりから入門されることをお勧めしたい。

六 中井久夫・永安朋子『分裂病の回復と養生—中井久夫選集』星和書店、2000、173-4頁他。

七 稲賀繁美「いかにのぼり　きのふの空のありどころ：天と地の「あいだ」を繋いで漂う霊のありか」『あじた』254号(2020年3月20日)、19-27頁。フランス語原文は「Kananori et tako dans la littérature haïkai et les arts plastiques—sonde fantôme entre le passé et le présent, la terre et le ciel」, in Cécile Lalry (éd.), *Cerfs-volant du Japon, à la croisée des arts*, Nouvelles Éditions Scala, 2021, pp.38-45.

脱の到達点が現れるものではない。新たな一步は未知の体験への再生となる。否定と肯定とは表裏をなし、メビウスの環のように入れ替わる。シテとウケの関係もこれを再演する。ギリシア神話のシジフォスは、岩を山頂に担ぎ上げるが、達成の瞬間には岩は谷底に転げ落ち、シジフォスはまた最初からすべてをやり直さねばならない。彼はそんな永劫の責め苦を背負ったのだ、と通常には解釈される。だが日本の哲学者、九鬼周造は、異なる解釈をくだした。シジフォスは永遠に再開するというその意志において、勝利をおさめているのだ、と<sup>マ</sup>。このあくことなき表裏の往還のうちに、「メディア的身体」が覚醒し、不断に実現されてゆく—その行程のさなかに、一步—一步と。インドの詩聖・ラビンドロナート・タゴールはこう語っている。至高の聖処は汝の道程の末に出現するものではない。それは汝の歩みの「道行き」*passage*の傍らにいつも佇んでいる—語りかけることはないまま、しかし汝の歩みにつれて、つねに汝に「触れて」いるのだ、と<sup>マ</sup>。

果たしてそこで、人がその聖処を眺めやっているのか、それともその聖処が我々を黙って見つめているのか。もはやそのどちらともも知ることができない。人が森を通る折、人は森から見つめられている、という感覚を抱く。鬱蒼とした木立から伝わる「低い声」*voix*あるいは「中動態」*voix moyenne*の「うした働きの」<sup>マ</sup>、ほかの数多の稽古事に伍して、武術の稽古が沈黙のうちに伝えてくれる「道」でもあるに違いない。

夜の静寂、至誠館に通じる明治神宮の参道、その森に包まれて歩む際の「触覚」が、こうして、ゆくりなくも記憶に蘇ってくる。<sup>マ</sup>

二〇二〇年九月四日

三 岡倉の書物は英語原文で読むことを強くお勧めしたい。Kakuzo Okakura, *The Book of Tea*, Dover Edition, 1960が on line 検索可能。別冊太陽『岡倉天心』平凡社、古田亮監修、2013の稲賀執筆箇所も参照された。

四 Kuki Shūzō and the Idea of *Mempsychosis*: Recontextualizing Kuki's Lecture on Time in the Intellectual Milieu Between the Two World Wars", *Japan Review*, No.31, International Research Center for Japanese Studies, 2017, pp.105-122.

五 *ニニ*の句は、タゴールが日本の画家、野生司香雪に手向けた詩句。その解釈と、フッサールの現象学との関係については、拙著『接触造形論』名古屋医科大学出版会、2016年、一六七ページ以下参照。この著書の扉にも同一の文言を掲げた。

六 本来は「*ニニ*」からが本論たるべきだが、紙面が尽きた。またこれは文章では伝達しがたい領域である。この先への道標として方条遼雨『上達論』PHP、2020。本書を含む考察から出発する筆者の稽古と思索は「あいだの哲学にむけて」『あいだ』255号(連載140回)、2020年6月発行予定以降に連載中。なお本稿は、拙稿「*Corps médial dans la pratique des arts-narratifs au Japon*」(forthcoming)の自由な部分訳である。